



2024年5月6放送

## 「第75回 日本皮膚科学会西部支部学術大会 ①

### 大会を終えて」

琉球大学大学院 皮膚科 教授  
高橋 健造

#### 12年ぶりの沖縄での開催

私ども琉球大学皮膚科が、第75回日本皮膚科学会西部支部学術大会を、昨年2023年9月16-17日の週末に、沖縄コンベンションセンターにて開催いたしました。事務局長として講師の山口さやかと、宮城拓也の二人が、学術企画、セミナーのスポンサー集め、おもてなしの沖縄のお店との交渉など、多くに力を尽くしてくれました。沖縄での開催は第63回大会以来、12年ぶりとなりました。

学会のサブタイトルは、「いちやしばちよーでー！美ら島で愉しむ皮膚科学」といたしました。いちやしばちよーでーというのは、行き会えば皆兄弟という沖縄言葉であります。

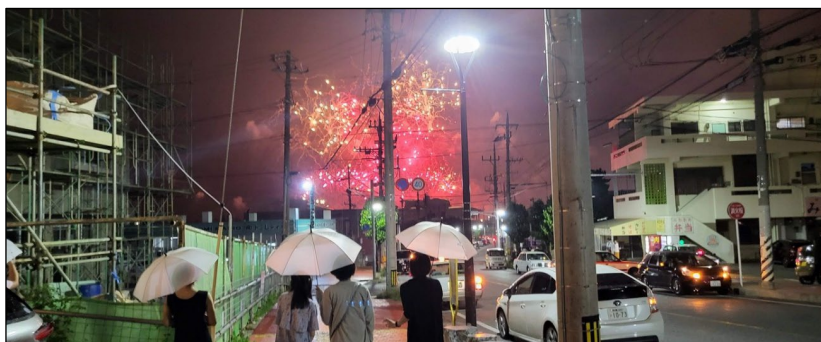
今となっては全く意識にも昇らなくなりましたが、2-3年前からの学会準備のスタートの頃は、新型コロナの影響がどの程度残り、コロナにも波がありましたので、規制が厳しい時期にあたるのか、緩む頃にあたるのか、それによって学会の開催形態や、懇親会のやりようなども、いろんなパターンを予想し計画しておりました。

また、沖縄での夏開催となりますと、常に台風の心配もあります。学会日の1週間前程からは、米軍の嘉手納基地が出してくれるタイフーンレポートをずっと注目して、ハラハラしておりました。とくに昨年初夏には10年ぶりに、軽自動車がひっくり返る大きな台風が沖縄本島を直撃しましたので少し心配でしたが、幸い学会期間は、夏晴れと時々スコールという沖縄らしい天気

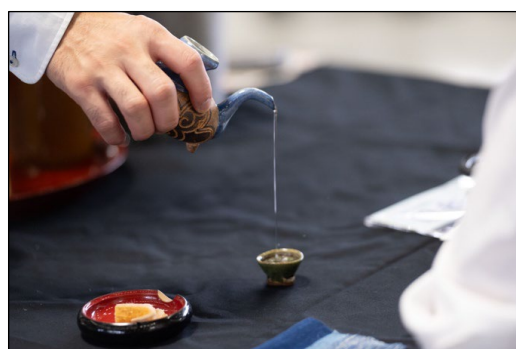


週末でした。

この学会日は、実は安室奈美恵さんの6年前の引退日でもあり、毎年記念花火大会の開催日にも重なり、沖縄にとっては安室さんは特別な存在ですし、街中がわさわさざわつくような連休でした。日曜の学会終了後には、学会会場裏のビーチから打ち上がる大量の花火を、安室さんのリズムにあわせて楽しむことも出来ました。



心配したコロナも昨年春には5類扱いとなり、ポスターや沖縄物産、企業展示などの学会展示会場の中央には、泡盛バーも開設し、学会発表や聴講の合間に多数の参加者が、数十年物の泡盛の古酒を味わっていただきました。那覇市内の会員制の泡盛バーのご主人でもある、泡盛マイスターの方に両日やってきて頂き、古酒のセレクションや蘊蓄などを話していただきました。



会場敷地内では、アロハシャツやかりゆしウエアの販売、沖縄バーガーや沖縄そば、沖縄サンゴコーヒのキッチンカーも一日中数台並びました。夜の懇親会では、沖縄ブタの丸焼きを4匹用意しましたが、大好評で会場のあちこちでは長蛇の列となり、あっという間に食べられて、ブタの骨格モデルとなりました。



食事後はディアマンティスさん達のライブで、沖縄ラテン音楽に合わせて大盛り上がりとなり、全てコロナをうっちゃって、企画通り開催が出来ました。多分、皮膚科関係の学会の中では、アルコール消費量は、断トツの学会だったと思います。お酒が好きな沖縄ですしね。



## 多彩な講演内容

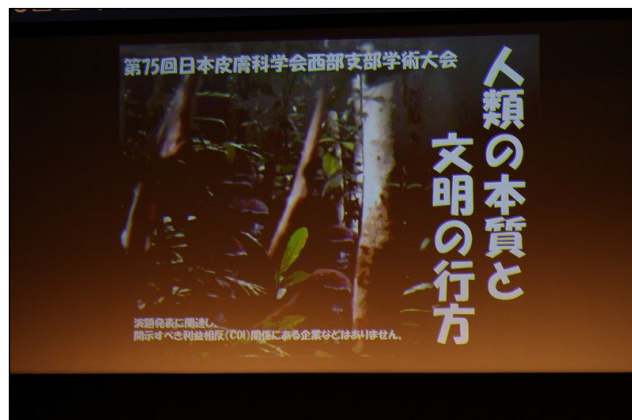
学術の方はと申しますと、一般演題は 193 演題の発表があり、全て口頭発表とポスター展示を頂き、優秀ポスターの投票もございました。クリニック、病院、大学勤務の、計6名の皮膚科の先生達に優秀賞を贈答いたしました。

学会の骨格といたしましては、5つのシンポジウム、7つの教育講演、3つの特別講演と文化講演、2つの特別企画、さらに専門医取得前後のキャリア維持のための講習会と、学会

よりお呼びした 67 名の講演の演者に加え、33 のスポンサードシンポジウムに 62 名の講師をお呼びいたしました。

期間を通して、参加者は 1,300 名を越え、学会準備の託児所にも、のべ 14 人の子供達を迎えました。日曜の午前に企画した、美ら海水族館の獣医さん達の、ヒトと動物の皮膚病の講演会場では、その子供達も、イルカやカメや熱帯魚、さらにイヌ、ネコ、トカゲなどの皮膚病のスライドに見入っていました。

学会の目玉でもある特別講演 1 には、前京都大学総長で、現在、総合地球環境学研究所 所長の山極壽一先生の類人猿学・人類学からみた地球の危機の講演を頂きました。行き詰まり感のある地球環境やコロナ、温暖化と人類の進化と文明の変遷において、そろそろ西洋の二元論：排中律に基づく科学世界ではなく、東洋の容中律に基づく、脱人間中心主義の霊長類学の応用による、新たな環境倫理を構築しなければならないと説かれました。



大阪大学の近藤滋教授には、特別講演 2 として、熱帯魚やチーターなどの縞模様やヒョウ柄模様が体のサイズが大きくなっても何故形状やサイズが維持されるのかなど、チューリングの数学モデルで紹介していただきました。皮膚科医にとっても、熱帯魚に囲まれた沖縄にとっても、興味深いお話でした。

文化講演は、朝日放送プロデューサー時代に「探偵！ナイトスクープ」でアホバカ分布図を企画し、現在は作家でもある松本修先生による、日本の話し言葉の変遷をお聞かせして貰いました。日本の言葉は古来、京都を中心とした同心円状に周圏へ広がり、各地の方言として京都から遠い地方ほど古い言葉が残り、例外的に琉球奄美諸島においては、京都からの言葉が、まず那覇の首里に渡り、この首里を中心にもう一度同心円状に沖縄本島より周辺の琉球諸島へ広がったと説明されています。アホとバカという言葉に込める温かみと突き放した感触が、日本の各地・地方により逆転いたします。京都でアホ、札幌でバカと言っても笑って済まされますが、逆に使ってしまうと、パワハラ、アカハラに該当してしまうかも知れません。私自身は高校まで北海道の札幌と小樽で過ごし、15 年前に沖縄へ来るまでは、関西の京都で暮らしましたので、3 つの言語圏を知る私にとって、是非にとご講演をお願いした次第でした。

懇親会でのダイヤモンドスのライブでは、この山極先生、近藤先生、松本先生達とも、皆で輪になって踊っていただきました。

学会のスタートは、琉球諸島の皮膚病と南の島での皮膚科診療と称しまして、琉球大学皮膚科の医局員によるリレー形式の講演で、ハンセン病やカポジ肉腫、血管肉腫、ハブやハブクラゲ、ATL に薬剤耐性のアタマジラミなど、沖縄に特有な公衆衛生上の課題で、沖縄に突

出して多く発症する皮膚病とその対応をご紹介するとともに、与論、石垣、与那国、徳之島、奄美、久米島と、多くの離島へ毎週セスナや定期便で離島へ飛んでいく医局員の働きぶりなどを紹介いたしました。

幾つもの教育講演としまして、京都大学の CiRA: iPS 研究所と神戸のアイセンターより高橋淳先生、高橋政代先生ご夫婦による「ここまで来た！実現間近の再生医療：iPS 細胞からの網膜、中枢神経疾患への臨床応用」、あるいは、東京大学教授の新蔵礼子先生による「腸管免疫、マイクロバイオーームと創薬」、さらには、順天堂大学臨床薬理学の佐瀬一洋先生による「日本の新薬・ワクチンの承認は遅いのか？安全なのか？」、といった一般医学や医療政策に関する講演や、大阪市で開業の葛西健一郎先生の歯に衣着せぬ「美容に関して言いたい！」や、赤穂市民病院の和田康夫先生がオーガナイズの「爪を診て・整える」等等、実は多くは私の高校の友人や大学の同級生、後輩に講演の幾つもお願いたしました。

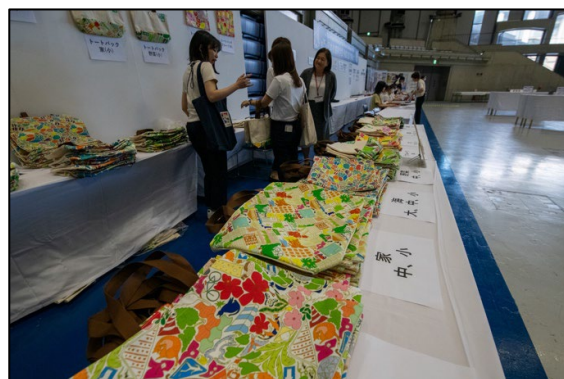
「形成外科のエキスパートに聞く」とした研修講習会では、東京医大の松村先生と、杏林大学の大浦先生のお二人の形成外科の教授をお迎えしました。大浦先生とはコロナ前の時期に西アフリカ（ガーナとコートジボアール）でのブルリ感染症による皮膚潰瘍対策で一緒にご縁です。専門医資格更新の講習としては、吉備国際大学教授の高橋淳先生に、フェイクニュースにダマされない新型コロナの疫学と、札幌の湊仁会病院理事長の成田吉明先生より医療安全に関して講演頂きました。彼ら二人も私の高校と大学の同級生であります。

## おわりに

コロナの3年間も明けた沖縄の夏の会でしたので、参加の先生達もスタッフの私共も、皆スーツやネクタイなどなしに、アロハシャツやかりゆしなどリラックスした服装で、ノーマスクで参加してくださいました。コンgresバッグも前回大会同様に沖縄のデザイナーによる、カラフルで楽しいバッグを作成し好評だったようです。

なにより本大会はコロナが明けて、初めて懇親会と招宴会をフルで開催された大会でした。日本皮膚科学会の学会チームの皆様にフルに助けて頂き、沖縄物産展やキッチンカーなど沖縄の雰囲気を味わって頂き、学会内容とも合わせ、当初の目標通り、十分に愉しんでもらえたと思います。予算規模も従来の支部学会よりは、多少多めにかかりましたが、大きなトラブルもなく、開催出来たことを医局のスタッフ共々、満足しております。

以上、沖縄での日本皮膚科学会 西部支部学術大会を終えてと題しましての、皮膚科セミナーをお聞きくださり、ありがとうございます。



「マルホ皮膚科セミナー」

<https://www.radionikkei.jp/maruhohifuka/>